

[ 建築的 / 都市的演算についての 20 のノート ]

1. 建築と都市をめぐるあらゆる思考は、何かしら演算的である、と見立てることができる。
2. 演算的であるとは、計画的でもなく偶発的でもなく、かつそのどちらでもあるような思考の全体である。
3. 建築と都市を演算的であると見立てることは、その思考の組み立てを、自律的でもなく、関係的でもない何ものかとして捉えることと、ほぼ同値である。
4. 演算は、行為の推移であって、事物の軌跡ではない。  
つまり、建築的 / 都市的演算とは、建築と都市を静的な事物ではなく、未完の行為の連続体として見立てることになぞらえられる。
5. 演算は、演算を行う演算子 (operator) と、演算の対象となる被演算子 (operand) からなる。
6. 被演算子としてのモノと空間に、様々な演算子を作用させて、新たなモノと空間の様相を生み出すこと。それが、建築的 / 都市的演算である。
7. しかしながら、加減乗除のような既存の演算子を作用させるというメタファーが、建築的 / 都市的演算を示唆しているのではない。  
さらに、それらの意図的な読み替えと修辞が、有効な思考を誘発するのでもない。  
例えば、 $1+1+1=5$  や、 $1\times 1\times 1=10$  といったよう願望的表記が、ここで求められているのではない。
8. 演算子は、様々に無限に創案可能である。  
被演算子は、あらゆる事象に当てはめうる。
9. 建築と都市への思考に即して、例えばここで、さしあたって次のような 5 つの演算子を抽出してみる。
  - a. 異化 dissimilation ある事象を、異なる文脈へと投げ入れること A/a A/b
  - b. 交配 crossbreeding ある事象を、別の事象と掛け合わせること A A・B
  - c. 反復 repetition ある事象を繰り返し、それを並列的に配置すること A AAAAAA
  - d. 転用 transformation ある事象に別次元の意味を与えて転移させること A B
  - e. 合成 synthesis ある事象に別の事象を重ねて融合させること A A/B

10.それぞれの演算は離散化されている。

したがって、各々の演算は重ね合わせ可能であり、組み合わせ可能である。

だから、5つの演算子による組み合わせの数は、2の5乗によって32という数を示唆している。

11.それぞれの演算は非対称的である。

したがって、それぞれの演算はその組み合わせの順序によって異なる作用が生成される。

12. 演算は、非人称的である。同時にそれは、常に個別的であり、局所的である。

13. 建築的 / 都市的演算の結果は、予測不可能である。そうでなければ、それは演算ではあり得ない。

14. ここでの演算は、プロスペクティブなるものの建築の技法であり、コンセプションの軌跡である。

15. 建築と都市をめぐるあらゆる事象は、それが被演算子となり得る限りにおいて、原理的にすべて未完の事象であると定義し得る。

つまり被演算子は、いかなる演算子の作用を受けた後にも、改めて被演算子として再定義される。

16. 演算子の組み合わせによって示唆された32という数が、ここで、演算の輪郭を描き出している。

それが、様々なヴァリエーションによる、5つの演算の限定的なモジュールをなしている。

白く塗り込められたそれら矩形の演算モジュールは、ここで、演算のプラットフォームをなしている。

17. 演算モジュールは、二進法的なもの、リニアな要素によって重ね書きされている。

このリニアな要素は、限定的な演算モジュールを踏破し、連結し、再領域化するものの総体である。

18. 建築的演算は、局所的な演算モジュールを組み合わせることの先で生み出される、モノの結果である。

19. 都市的演算は、局所的な演算モジュールを外縁へと発散させることで生まれる、関係の概念の形である。

20. プロスペクティブなるものは、これら演算的なるものの先で、ときおり表出される連鎖的行為にすぎない。

それはかけ算でもなく足し算でもなく、何かそうした安定から逸脱した最小単位の揺らぎにすぎない。

あらゆる事象は被演算子となり、あらゆる作用は演算子に見立てられる。

だとしたら、建築と都市をめぐるいかなる思考も、今なお、すべては演算的であり得る。

だから、建築的 / 都市的思考と実践は、情念の偏差を消去したこの先においても、技術が飽和したかに見えるこの先においても、いささかも、その可能性が減じられているわけではない。